

ボール運動系領域（ゴール型）における技能の 指導内容の適切性に関する研究

——教師による評価を通して——

A study on the appropriateness for the contents of the motor skills of the Ball Games
- Through the evaluation by teachers -

深田 直宏・大友 智・吉井 健人・南島永衣子・
上田 憲嗣・梅垣 明美・宮尾 夏姫・友草 司
FUKADA Naohiro・OTOMO Satoshi・YOSHII Takehito・MINAMISHIMA Eiko・
UETA Kenji・UMEGAKI Akemi・MIYAO Natsuki・TOMOKUSA Tsukasa

I 緒言

平成 20 年及び 21 年に告示された学習指導要領（文部科学省、2008、2009）では、ボール運動系領域に関して、以下の 2 点が大きく変更された。1 つ目は、従来のサッカー、あるいは、バスケットボール等の特定の種目を指導するという考えから、多様な種目を戦術面から、ゴール型、ネット型、ベースボール型の 3 つに分類し、それらの型に共通する技術・戦術を指導するという考え方への変更であった。2 つ目は、戦術的な観点から「ボール操作の技術」及び「ボールを持たない時の動き」を児童生徒の発達段階に合わせて系統的に位置づけるという指導内容に関する変更であった。これらの変更は、指導内容の明確化・体系化を図ることにより、指導内容を確実に身に付けることをねらいとしたものであった。

このように指導内容は明確化・体系化されたが、「誰もが安定した学習成果を保障し得る学習指導の手続きは、不明瞭な状況である」（岡出、2007）との指摘や、「どのようなボール運動を各学年に位置づけていくのかということが、今後、現場での重要な課題になる」（高橋、2008）との指摘もみられた。つまり、実際の授業において、どのような手続きで、どこまで指導するかは明確でないとの指摘である。

この点に関して、第一に児童生徒の技能獲得の観点から、第二に教師による評価の観点から、検討が進められている。

第一の児童生徒の技能獲得の観点から分析する

研究には、以下がある。

中垣・岡出（2009）は中学生を対象としたベースボール型に関して、北村ら（2014）は小学校中・高学年を対象にしたネット型ゲームに関して、研究を行った。そこでは、現行の学習指導要領において、一定の学習成果を保障するという観点から、個々の児童生徒が獲得し得る達成基準を明らかにしようとした。これらの研究によって、個々の児童生徒の達成状況から、評価基準が作成された。

第二の教師による評価の観点から分析する研究には、以下がある。

丸山（2014）は、「学校の自主性や自律性を重視し、それぞれの地域や学校に応じた実践的な『カリキュラム開発』を教師たちの手で進めることである」と主張した。丸山の主張は、カリキュラム開発そのものから教師が行い、それに基づき授業実践を行い、評価する、という一連の流れである。しかし、学習指導要領が法的拘束力を持つ（岩田、2004）我が国の教育制度のもとでは、教師がカリキュラム開発から、その評価までを行い、検討を進めていくのは難しいと考えられる。

一方、学習指導要領解説（以下「解説」と記す）に示された指導内容とそれを指導する学年との対応関係について教師による評価の観点から分析する研究に関しては、日本体育科教育学会（2015）による報告が見られる。この研究の目的は、「解説に記された指導内容に対して、授業者が率直に感じている指導時期の妥当性に対する評価並びに指導の実態について明らかにする」（日本体育科

教育学会、2015）ことであった。調査は、小学校、中学校及び高等学校教師を対象に調査票によって実施された。調査票の設問は、解説における指導内容の記述を踏まえて設定され、その指導時期の妥当性に対する評価を、各校種の教師に求めるものであった。一例を示すと、解説に記述されている「パスやドリブルなどでボールをキープすること」（中学校第1学年及び第2学年の内容）に対して、「例示された学年より早めの指導がよい95%」、例示された学年が適切である5%、例示された学年より遅めがよい0%、「分からない0%」というものであった。得られたデータに関しては、各選択項目の割合が示されるにとどまり、統計的な検定が行われていないため、明確な傾向を示すことができず、そのため、調査から得られた結果に対する考察も十分に行われていない。

以上の先行研究の状況から、本研究の目的を、児童生徒の学年段階に対応した技能の指導内容の適切性について、小学校、中学校、及び、高等学校の教師による評価から明らかにすることに設定した。特に本研究では、得られたデータに関して、統計的な検定を加え考察を行う。

なお、これまで指導内容が不明確と指摘されてきた（吉田、1997）ボール運動系領域を対象とし、ゴール型に焦点を当てて調査を行った。

II 方法

1 調査対象

対象は、N県の小学校教師174人、中学校教師87人、及び、高等学校教師39人であった（表1参照）。全て、体育授業を行っている教師であった。

表1 校種ごとの対象人数、有効回答数及び回収率

校種	対象人数(人)	有効回答数	回収率(%)
小学校	174	141	81.0
中学校	87	84	96.5
高等学校	39	37	94.8

2 調査時期

調査時期は、2014年1月であった。

3 調査方法

解説における指導内容の記述を元に、筆者らが質問紙を作成した。質問項目として設定した指導内容が、どの学年段階に適切と考えるかを、対象教師に評価をしてもらった。回答の選択肢は、「小学校4年まで」（以下、「小4まで」と略す）を1、「小学校5年から6年まで」（以下、「小5-6まで」と略す）を2、「中学校1年から2年まで」（以下、「中1-2まで」と略す）を3、「中学校3年から高校卒業まで」（以下、「中3-高3まで」と略す）を4、「分からない」を5として5件法で設定した。

4 分析方法

質問項目ごとに χ^2 検定を行い、回答傾向を分析した。回答間に有意差（ $p<.05$ ）が見られた項目に関しては、ライアンの多重比較を行った。なお、「分からない」と回答した対象者は、質問項目毎に分析から除外した。

III 結果

1 小学校教師による評価

小学校教師の、小学校の指導内容に対する回答結果、及び、中学校の指導内容に対する回答結果は、それぞれ表2、表3に示した通りであった。

(1) 小学校の指導内容に関する分析

1) 「ボール操作の技術」に関して

「ボール操作の技術」に関する指導内容について、多重比較の結果、「ボールを持ったらゴールに体を向ける」に関しては、「小4まで」及び「小5-6まで」とそれ以降の学年段階の間に有意差が認められた。「味方にボールを手渡したり、パスを出す」に関しては、「小4まで」とそれ以降の学年段階の間に有意差が認められた。「フリーの味方へのパス」に関しては、「小4まで」及び「小5-6まで」とそれ以降の学年段階の間に有意差が認められた。「相手に取られない位置でドリブルする」に関しては、「小4まで」と「小5-6まで」の間に有意差が認められ、また、「中1-2まで」と「中3-高3まで」の間に有意差が認められた。

以上から、小学校段階に例示された「ボール操作の技術」に関して、小学校教師は、概ね適切であると考えていることが確認された。

表2 小学校の指導内容に対し、小学校教師が適切と選んだ結果

No.	解説に例示されている学年段階	指導内容	各学年段階における具体的指導内容	N=141人		下はその選択肢を選んだ教師の人数(人) 上は対象人数に対する割合(%)				カイ2乗値 有意差	選択肢間の多重比較の結果 有意差のあったもののみ示した(p<.05)
				対象	欠損値	小学校4年まで	小学校5年から 6年まで	中学校1年から 2年まで	中学校3年から 高校卒業まで		
						A	B	C	D		
1	小学校第3学年及び第4学年	ボール操作	ボールを持ったらゴールに体を向ける	138	3	50.7 70	39.9 55	7.2 10	2.2 3	94.870 *	A>C A>D B>C B>D
2	小学校第3学年及び第4学年	ボール操作	味方にボールを手渡ししたり、パスを出す	140	1	92.9 130	7.1 10			345.714 *	A>B A>C A>D B>C B>D
4	小学校第5学年及び第6学年	ボール操作	フリーの味方へのパス	140	1	37.9 53	49.3 69	11.4 16	1.4 2	83.714 *	A>C A>D B>C B>D C>D
5	小学校第5学年及び第6学年	ボール操作	相手に取られない位置でドリブルする	140	1	19.3 27	42.9 60	33.6 47	4.3 6	47.829 *	A<B A>D B>D C>D
3	小学校第3学年及び第4学年	持たない動き	ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動する	140	1	16.4 23	55.7 78	24.3 34	3.6 5	82.686 *	A<B A>D B>C B>D C>D
6	小学校第5学年及び第6学年	持たない動き	ボール保持者と自分の間に守備者を入れないように立つ	140	1	23.6 33	67.9 95	8.6 12		153.086 *	A<B A>C A>D B>C B>D C>D
7	小学校第5学年及び第6学年	持たない動き	得点しやすい場所への移動	141	0	32.6 46	54.6 77	12.8 18		96.418 *	A<B A>C A>D B>C B>D C>D
8	小学校第5学年及び第6学年	持たない動き	シュートコースに立って得点を防ぐ	140	1	25.0 35	48.6 68	20.7 29	5.7 8	52.971 *	A<B A>D B>C B>D C>D

困んだところは、小学校学習指導要領解説体育編に例示されている学年段階を示す (*p<.05)

表3 中学校第1学年及び第2学年の指導内容に対し、小学校教師が適切と選んだ結果

No.	解説に例示されている学年段階	指導内容	各学年段階における具体的指導内容	N=141人		下はその選択肢を選んだ教師の人数(人) 上は対象人数に対する割合(%)				カイ2乗値 有意差	選択肢間の多重比較の結果 有意差のあったもののみ示した(p<.05)
				対象	欠損値	小学校4年まで	小学校5年から 6年まで	中学校1年から 2年まで	中学校3年から 高校卒業まで		
						A	B	C	D		
9	中学校第1学年及び第2学年	ボール操作	得点しやすい味方へのパス	141	0	25.5 36	61.7 87	12.8 18		119.681 *	A<B A>C A>D B>C B>D C>D
10	中学校第1学年及び第2学年	ボール操作	ノーマークの味方へのパス	141	0	46.1 65	36.9 52	12.8 18	4.3 6	65.780 *	A>C A>D B>C B>D C>D
11	中学校第1学年及び第2学年	ボール操作	ドリブルでのキープ	140	1	16.4 23	42.1 59	30.7 43	10.7 15	33.829 *	A<B A<C B>D C>D
12	中学校第1学年及び第2学年	持たない動き	ボール保持者のマーク	141	0	38.3 54	43.3 61	17.0 24	1.4 2	63.738 *	A>C A>D B>C B>D C>D
13	中学校第1学年及び第2学年	持たない動き	ゴール前の空いている場所へ移動し、パスを受ける	141	0	16.3 23	66.0 93	17.0 24	.7 1	135.738 *	A<B A>D B>C B>D C>D
14	中学校第1学年及び第2学年	持たない動き	ボールとゴールが同時に見える場所に立つ	138	3	9.4 13	38.4 53	39.9 55	12.3 17	44.377 *	A<B A<C B>D C>D

困んだところは、中学校学習指導要領解説体育編に例示されている学年段階を示す (*p<.05)

ただし、ドリブルの指導内容に関しては、中学校段階で指導することが適切であると考えている教師も確認された。

2) 「ボールを持たない動き」に関して

「ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動する」に関しては、解説に例示された学年段階は小学校第3学年及び第4学年（以下、「小学3-4年」と略す）であったが、多重比較の結果、「小4まで」と「小5-6まで」の間に有意差が認められた。「ボール保持者と自分の間に守備者を入れないように立つ」、「得点しやすい場所への移動」及び「シュートコースに立って得点を防ぐ」に関しては、「小4まで」と「小5-6まで」の間に有意差が認められ、また、「小5-6まで」と中学校以降の間に有意差が認められた。

以上から、小学校段階に例示された「ボールを

持たない動き」に関して、小学校教師は、小学3-4年に例示された指導内容について、小学校第5学年及び第6学年（以下、「小学5-6年」と略す）の方が適切であると考えている。また、小学5-6年に例示された指導内容に関しては、適切であると考えていることが確認された。

(2) 中学校の指導内容に関する分析

1) 「ボール操作の技術」に関して

中学校第1学年及び第2学年（以下、「中学1-2年」と略す）に例示されている「得点しやすい味方へのパス」及び「ノーマークへの味方へのパス」に関しては、多重比較の結果、小学校段階と中学校以降の間に有意差が認められた。「ドリブルでのキープ」に関しては、「小5-6まで」と「中1-2まで」の間に有意差が認められなかった。また、「小4まで」と「小5-6まで」の間に有意差が認

められ、「中1-2まで」と「中3-高3まで」の間に有意差が認められた。

以上から、パスに関する技能について、小学校教師は、例示よりも早い小学校段階で指導することが適切であると考えていることが確認された。ドリブルに関わる技能に関しては、小学校高学年から中学校にかけての指導が適切であると考えられる傾向のあることが確認された。

2) 「ボールを持たない動き」に関して

多重比較の結果、「ボール保持者のマーク」及び「ゴール前の空いている場所へ移動し、パスを受ける」に関しては、小学校段階と中学校以降で有意差が認められた。「ボールとゴールが同時に見える場所に立つ」に関しては、「小4まで」と「小5-6まで」、及び「中1-2まで」と「中3-高3まで」の間に有意差が認められた。

以上から、ディフェンスに関する技能、及びパスを受ける動きに関して、小学校教師は、例示よりも早い小学校段階での指導が適切な内容であると

考えていることが確認された。また、「ボールとゴールが同時に見える場所に立つ」技能に関しては、小学校高学年から中学校にかけての指導が適切な課題と考えていることが確認された。

2 中学校教師による評価

中学校教師の、小学校の指導内容に対する回答結果、中学1-2年の指導内容に対する回答結果、及び、中学校第3学年から高校卒業（以下、「中学3-高校3年」と略す）までの指導内容に対する回答結果は、それぞれ表4、表5、表6に示した通りであった。

(1) 小学校の指導内容に関する分析

1) 「ボール操作の技術」に関して

多重比較の結果、「ボールを持ったらゴールに体を向ける」は、「小5-6まで」と「中1-2まで」の間に有意差が認められた。「味方にボールを手渡したり、パスを出す」に関しては、「小4まで」と「小5-6まで」の間に有意差が認められた。ま

表4 小学校の指導内容に対し、中学校教師が適切と選んだ結果

No.	解説に例示されている学年段階	指導内容	各学年段階における具体的指導内容	N=84人		下はその選択肢を選んだ教師の人数(人) 上は対象人数に対する割合(%)				カイ2乗値 有意差	選択肢間の多重比較の結果 有意差のあったもののみ示した(p<0.05)
				対象	欠損値	小学校4年まで	小学校5年から6年まで	中学校1年から2年まで	中学校3年から高校卒業まで		
						A	B	C	D		
1	小学校第3学年及び第4学年	ボール操作	ボールを持ったらゴールに体を向ける	83	1	37.3 31	42.2 35	19.3 16	1.2 1	34.735 *	A>D B>C B>D C>D
2	小学校第3学年及び第4学年	ボール操作	味方にボールを手渡したり、パスを出す	83	1	72.3 60	26.5 22	1.2 1	113.867 *	113.867 *	A>B A>C A>D B>C B>D
4	小学校第5学年及び第6学年	ボール操作	フリーの味方へのパス	84	0	16.7 14	41.7 35	39.3 33	2.4 2	35.714 *	A<B A<C A>D B>D C>D
5	小学校第5学年及び第6学年	ボール操作	相手に取られない位置でドリブルする	83	1	8.4 7	45.8 38	37.3 31	8.4 7	37.627 *	A<B A<C B>D C>D
3	小学校第3学年及び第4学年	持たない動き	ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動する	82	2	3.7 3	26.8 22	57.3 47	12.2 10	54.683 *	B>A C>A B<C C>D
6	小学校第5学年及び第6学年	持たない動き	ボール保持者と自分の間に守備者を入れないように立つ	82	2	14.6 12	41.5 34	39.0 32	4.9 4	32.146 *	A<B A<C B>D C>D
7	小学校第5学年及び第6学年	持たない動き	得点しやすい場所への移動	84	0	7.1 6	46.4 39	42.9 36	3.6 3	52.286 *	A<B A<C B>D C>D
8	小学校第5学年及び第6学年	持たない動き	シュートコースに立って得点を防ぐ	83	1	12.0 10	43.4 36	34.9 29	9.6 8	27.892 *	A<B A<C B>D C>D

で困んだところは、小学校学習指導要領解説体育編に例示されている学年段階を示す

(*p<0.05)

表5 中学校第1学年及び第2学年の指導内容に対し、中学校教師が適切と選んだ結果

No.	解説に例示されている学年段階	指導内容	各学年段階における具体的指導内容	N=84人		下はその選択肢を選んだ教師の人数(人) 上は対象人数に対する割合(%)				カイ2乗値 有意差	選択肢間の多重比較の結果 有意差のあったもののみ示した(p<0.05)
				対象	欠損値	小学校4年まで	小学校5年から6年まで	中学校1年から2年まで	中学校3年から高校卒業まで		
						A	B	C	D		
9	中学校第1学年及び第2学年	ボール操作	得点しやすい味方へのパス	83	1	12.0 10	38.6 32	48.2 40	1.2 1	48.325 *	A<B A<C A>D B>D C>D
10	中学校第1学年及び第2学年	ボール操作	ノーマークの味方へのパス	83	1	25.3 21	39.8 33	31.3 26	3.6 3	23.747 *	A>D B>D C>D
11	中学校第1学年及び第2学年	ボール操作	ドリブルでのキープ	82	2	14.6 12	42.7 35	36.6 30	6.1 5	29.902 *	A<B A<C B>D C>D
12	中学校第1学年及び第2学年	持たない動き	ボール保持者のマーク	84	0	23.8 20	38.1 32	36.9 31	1.2 1	29.619 *	A>D B>D C>D
13	中学校第1学年及び第2学年	持たない動き	ゴール前の空いている場所へ移動し、パスを受ける	84	0	2.4 2	38.1 32	54.8 46	4.8 4	66.476 *	A<B A<C B>D C>D
14	中学校第1学年及び第2学年	持たない動き	ボールとゴールが同時に見える場所に立つ	83	1	13.3 11	21.7 18	51.8 43	13.3 11	33.386 *	A<C B<C C>D

で困んだところは、中学校学習指導要領解説体育編に例示されている学年段階を示す

(*p<0.05)

表6 中学校第3学年から高校卒業までの指導内容に対し、中学校教師が適切と選んだ結果

No.	解説に例示されている学年段階	指導内容	各学年段階における具体的指導内容	N=84人				下はその選択肢を選んだ教師の人数(人) 上は対象人数に対する割合(%)				カイ2乗値 有意差	選択肢間の多重比較の結果 有意差のあったもののみ示した(p<0.05)		
				対象	欠損値	小学校4年まで		小学校5年から 6年まで		中学校1年から 2年まで				中学校3年から 高校卒業まで	
						A	B	C	D						
15	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	自分の体で防いだキープ	84	0	11.9 10	33.3 28	46.4 39	8.3 7	32.857 *	A<B A<C B>D C>D				
16	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	味方が操作しやすいパス	84	0	7.1 6	38.1 32	48.8 41	6.0 5	47.714 *	A<B A<C B>D C>D				
24	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	味方が作り出した空間にパス	82	2	2.4 2	15.9 13	43.9 36	37.8 31	36.537 *	A<B A<C A<D B<C B<D				
25	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	守備者のタイミングをはずし、守備者のいないところを狙ってシュート	83	1		12.0 10	47.0 39	41.0 34	50.831 *	A<B A<C A<D B<C B<D				
26	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	守備者のタイミングを外してシュートを打つ	83	1	1.2 1	24.1 20	54.2 45	20.5 17	47.843 *	A<B A<C A<D B<C C>D				
27	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	守備者の少ないゴールエリアに向かってトラライする	79	5	7.6 6	19.0 15	58.2 46	15.2 12	48.646 *	A<C B<C C>D				
28	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	ゴールに向かってボールをコントロールして運ぶ	82	2	18.3 15	40.2 33	36.6 30	4.9 4	26.780 *	A>D B>D C>D				
29	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	守備者とボールの間に体を入れ、周りの動きを見ながらボールキープ	84	0		31.0 26	39.3 33	29.8 25	29.810 *	A<B A<C A<D				
30	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	シュートを打たれない空間にボールをクリアする	83	1	4.8 4	33.7 28	44.6 37	16.9 14	30.976 *	A<B A<C C>D				
17	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	ゴールの枠内にシュートをコントロールする	83	1	15.7 13	41.0 34	38.6 32	4.8 4	30.976 *	A<B A<C B>D C>D				
18	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	守備者を引きつけ、ゴール前に広い空間を作り出す動き	84	0	2.4 2	11.9 10	42.9 36	42.9 36	44.381 *	A<C A<D B<C B<D				
19	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	ボール保持者の進行方向から離れ、進行できる空間を作り出す動き	82	2	1.2 1	12.2 10	36.6 30	50.0 41	48.829 *	A<B A<C A<D B<C B<D				
20	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	ゴールとボール保持者を結んだ直線上で守る	84	0	4.8 4	35.7 30	50.0 42	9.5 8	46.667 *	A<B A<C B>D C>D				
21	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	ゴール前の空いている場所をカバーする	84	0		26.2 22	46.4 39	27.4 23	36.667 *	A<B A<C A<D				
22	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	ゴール前への動き出し	82	2	7.3 6	39.0 32	43.9 36	9.8 8	36.049 *	A<B A<C B>D C>D				
23	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	パス後の次のパスを受ける動き	83	1	3.6 3	32.5 27	51.8 43	12.0 10	46.494 *	A<B A<C B>D C>D				
31	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	自陣から相手陣地の侵入しやすい場所へ移動する動き	81	3	4.9 4	29.6 24	51.9 42	13.6 11	41.321 *	A<B A<C C>D				
32	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	シュートしたり、パスを受けたりするために、味方が作り出した空間へ移動する動き	83	1	1.2 1	16.9 14	59.0 49	22.9 19	59.602 *	A<B A<C A<D B<C C>D				
33	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	(モールやラックから)味方と連携してボールをつなぐ	82	2	6.1 5	24.4 20	41.5 34	28.0 23	20.927 *	A<B A<C A<D				
34	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	ボール保持者のプレイしやすい空間のために、必要な場所に留まったり、移動したりする動き	82	2		14.6 12	45.1 37	40.2 33	44.927 *	A<B A<C A<D B<C B<D				
35	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	(スクリーンプレイやポストプレイなど)見方がゴール前に侵入する空間を作り出す動き	83	1	1.2 1	6.0 5	37.3 31	55.4 46	66.542 *	A<C A<D B<C B<D				
36	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	味方の守備が抜かれた時のカバーの動き	83	1		13.3 11	49.4 41	37.3 31	50.157 *	A<B A<C A<D B<C B<D				
37	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	ゴール前のエリアから、シュートを打ちにくい空間に相手に追い出す守備の動き	84	0	1.2 1	6.0 5	31.0 26	61.9 52	78.190 *	A<C A<D B<C B<D C<D				
38	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	チームの役割に応じた動き	83	1	2.4 2	15.7 13	44.6 37	37.3 31	37.627 *	A<B A<C A<D B<C B<D				

で囲んだところは、中学校及び高等学校学習指導要領解説体育編に例示されている学年段階を示す

(*p<0.05)

た、「フリーの味方へのパス」及び「相手に取られない位置でドリブルする」に関しては、「小4まで」と「小5-6まで」の間、さらに「中1-2まで」と「中3-高3まで」の間に有意差が認められた。

以上から、中学校教師は「ボールを持ったらゴールに体を向ける」及び「味方にボールを手渡したり、パスを出す」に関しては、小学校段階での指導が適切であると考えられる傾向のあることが確認された。また、「フリーの味方へのパス」及び「相手に取られない位置でドリブルする」は、小学校高学年から中学校での指導が適切であると考えていることが確認された。

2) 「ボールを持たない動き」に関して

小学3-4年の指導内容「ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動する」に関しては、多重比較の結果、「小5-6まで」と「中1-2まで」の間に有意差が認められた。「ボール保持者と自分の間に守備者を入れないように立つ」、「得点しやすい場所への移動」及び「シュートコースに立って得点を防ぐ」に関しては、「小4まで」と「小5-6まで」の間、及び「中1-2まで」と「中3-高3まで」の間に有意差が認められた。

以上から、小学校の「ボールを持たない動き」の指導内容に関しては、中学校教師は、小学5-6年から中学1-2年までに指導することが適切と考えていることが確認された。

(2) 中学校及び高等学校の指導内容に関する分析

1) 「ボール操作の技術」に関して

「得点しやすい味方へのパス」に関する多重比較の結果、「小4まで」と「小5-6まで」の間に有意差が認められた。さらに「小4まで」と「中3-高3まで」の間にも有意差が認められた。「ノーマークの味方へのパス」は、「小4まで」、「小5-6まで」及び「中1-2まで」の間に有意差が認められなかった。つまり、パスの技能に関しては、小学校中学年から中学2年まで各学年に分散しており特定の学年に集中する傾向は見られなかった。「ドリブルでのキープ」に関しては、「小4まで」と「小5-6まで」の間に有意差が見られた。また、「中1-2まで」と「中3-高3まで」の間に有意差が認められた。

以上から、パスに関する技能について、中学校教師は、小学校中学年から指導を始め、中学2年までの各学年段階で指導することが適切である、また、ドリブルに関する技能については、小学校高学年から中学2までに指導することが適切である、と考えていることが確認された。

2) 「ボールを持たない動き」に関して

「ボール保持者のマーク」に関して多重比較を行った結果、「中3-高3まで」とその他の学年段階に有意差が認められたが、「小4まで」から「中1-2まで」の間には、有意差が認められなかった。「ゴール前の空いている場所へ移動し、パスを受ける」に関しては、「小4まで」と「小5-6まで」の間に有意差が認められた。また「中1-2まで」と「中3-高3まで」の間に有意差が認められた。

また、「小5-6まで」と「中1-2まで」の間に有意差は認められなかった。「中3-高3まで」の14の指導内容のうち、「ゴールとボール保持者を結んだ直線上で守る」、「ゴール前への動きだし」、「パス後の次のパスを受ける動き」、「自陣から相手陣地の進入しやすい場所へ移動する動き」及び「シュートしたり、パスを受けたりするために、味方が作り出した空間へ移動する動き」の5つの指導内容に関しては、多重比較の結果、「中3-高3まで」とその前の「中1-2まで」の間に有意差が認められた。つまり、当該学年より早い段階での指導がよいと考える傾向のあることが確認された。また、他の9つの指導内容では、多重比較の結果、「中3-高3まで」又はその前の「中1-2まで」の学年段階が、それ以前の学年段階に対して有意差が認められた。

以上から、当該学年以上における「ボールを持たない動き」の指導内容に関して、中学校教師は、14の指導内容のうち、5つの指導内容に関して、当該学年より早い学年段階で指導した方が良いと考えていることが確認された。反面、9つの指導内容に関しては、当該学年が適切、又は、その前の学年段階から指導すべきと考えていることが確認された。

3 高等学校教師による評価

高等学校教師の、中学1-2年の指導内容に対する回答結果、及び、中学3年-高校3年の指導内容に対する回答結果は、それぞれ表7、表8に示した通りであった。

表7 中学校第1学年及び第2学年の指導内容に対し、高等学校教師が適切と選んだ結果

No.	解説に例示されている学年段階	指導内容	各学年段階における具体的な指導内容	N=37人		下はその選択肢を選んだ教師の人数(人) 上は対象人数に対する割合(%)				カイ2乗値 有意差	選択肢間の多重比較の結果 有意差のあったもののみ示した(p<.05)
				対象	欠損値	小学校4年まで	小学校5年から 6年まで	中学校1年から 2年まで	中学校3年から 高校卒業まで		
						A	B	C	D		
9	中学校第1学年 及び第2学年	ボール操作	得点しやすい味方へのパス	35	2	8.6 3	57.1 20	17.1 6	17.1 6	19.971 *	A<B B>C B>D
10	中学校第1学年 及び第2学年	ボール操作	ノーマークの味方へのパス	37	0	29.7 11	24.3 9	32.4 12	13.5 5	3.108	
11	中学校第1学年 及び第2学年	ボール操作	ドリブルでのキープ	37	0	16.2 6	37.8 14	32.4 12	13.5 5	6.351	
12	中学校第1学年 及び第2学年	持たない動き	ボール保持者のマーク	37	0	13.5 5	51.4 19	24.3 9	10.8 4	15.216 *	A<B B>D
13	中学校第1学年 及び第2学年	持たない動き	ゴール前の空いている場所へ移動し、パスを受ける	36	1	2.8 1	38.9 14	41.7 15	16.7 6	14.889 *	A<B A<C
14	中学校第1学年 及び第2学年	持たない動き	ボールとゴールが同時に見える場所に立つ	36	1	19.4 7	25.0 9	33.3 12	22.2 8	1.556	

(*p<0.05)

で困んだところは、中学校学習指導要領解説体育編に例示されている学年段階を示す

表 8 中学校第 3 学年から高校卒業までの指導内容に対し、高等学校教師が適切と選んだ結果

No.	解説に例示されている学年段階	指導内容	各学年段階における具体的指導内容	N=37人		下はその選択肢を選んだ教師の人数(人) 上は対象人数に対する割合(%)				カイ2乗値 有意差	選択肢間の多重比較の結果 有意差のあったもののみ示した(p<.05)
				対象	欠損値	小学校4年まで	小学校5年から6年まで	中学校1年から2年まで	中学校3年から高校卒業まで		
						A	B	C	D		
15	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	守備者のタイミングを外してシュートを打つ	36	1	2.8 1	13.9 5	38.9 14	44.4 16	17.111 *	A<C A<D
16	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	自分の体で防いだキープ	36	1	2.8 1	36.1 13	44.4 16	16.7 6	15.333 *	A<B A<C
17	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	味方が操作しやすいパス	36	1	13.9 5	25.0 9	47.2 17	13.9 5	10.667 *	
18	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	ゴールの枠内にシュートをコントロールする	37	0	24.3 9	27.0 10	37.8 14	10.8 4	5.486	
19	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	味方が作り出した空間にパス	36	1		11.1 4	27.8 10	61.1 22	30.667 *	A<C A<D B<D
20	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	守備者のタイミングをはずし、守備者のいないところを狙ってシュート	37	0		13.5 5	35.1 13	51.4 19	23.000 *	A<C A<D B<D
21	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	守備者の少ないゴールエリアに向かってトライする	35	2	8.6 3	25.7 9	37.1 13	28.6 10	6.029	
22	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	ゴールに向かってボールをコントロールして運ぶ	37	0	24.3 9	35.1 13	32.4 12	8.1 3	6.568	
23	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	守備者とボールの間に体を入れ、周りの動きを見ながらボールキープ	36	1		11.1 4	61.1 22	27.8 10	30.667 *	A<C A<D B<C
24	中学校第3学年から高校卒業まで	ボール操作	シュートを打たれない空間にボールをクリアする	36	1	8.3 3	38.9 14	30.6 11	22.2 8	7.333	
25	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	守備者を引きつけ、ゴール前に広い空間を作り出す動き	34	3		14.7 5	20.6 7	64.7 22	31.647 *	A<D B<D C<D
26	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	ボール保持者の進行方向から離れ、進行できる空間を作り出す動き	36	1		5.6 2	38.9 14	55.6 20	30.667 *	A<C A<D B<C B<D
27	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	ゴールとボール保持者を結んだ直線上で守る	36	1	11.1 4	27.8 10	50.0 18	11.1 4	14.667 *	A<C C>D
28	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	ゴール前の空いている場所をカバーする	36	1		22.2 8	47.2 17	30.6 11	16.667 *	A<B A<C A<D
29	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	ゴール前への動き出し	36	1	5.6 2	22.2 8	41.7 15	30.6 11	10.000 *	A<C
30	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	パス後の次のパスを受ける動き	37	0	8.1 3	29.7 11	37.8 14	24.3 9	7.000	
31	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	自陣から相手陣地の侵入しやすい場所へ移動する動き	36	1		22.2 8	58.3 21	19.4 7	25.556 *	A<C A<D
32	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	シュートしたり、パスを受けたりするために、味方が作り出し空間へ移動する動き	34	3		5.9 2	41.2 14	52.9 18	27.647 *	A<C A<D B<C B<D
33	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	(モールやラックから)味方と連携してボールをつなぐ	35	2	2.9 1	17.1 6	37.1 13	42.9 15	14.257 *	A<C A<D
34	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	ボール保持者のプレイしやすい空間のために、必要な場所に留まったり、移動したりする動き	36	1		5.6 2	36.1 13	58.3 21	32.222 *	A<C A<D B<C B<D
35	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	(スクリーンプレイやポストプレイなど)見方がゴール前に侵入する空間を作り出す動き	36	1		2.8 1	22.2 8	75.0 27	52.222 *	A<D C<D
36	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	味方の守備が抜かれた時のカバーの動き	36	1		11.1 4	41.7 15	47.2 17	22.889 *	A<C A<D B<C B<D
37	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	ゴール前のエリアから、シュートを打ちにくい空間に相手を追い出す守備の動き	36	1		11.1 4	27.8 10	61.1 22	30.667 *	A<C A<D B<D
38	中学校第3学年から高校卒業まで	持たない動き	チームの役割に応じた動き	36	1	2.8 1	11.1 4	50.0 18	36.1 13	20.667 *	A<C A<D B<C

で困んだところは、中学校及び高等学校学習指導要領解説体育編に例示されている学年段階を示す (*p<.05)

(1) 中学 1-2 年の指導内容に関する分析

1) 「ボール操作の技術」に関して
 高等学校教師が回答した「中 1-2 まで」の指導内容に関して χ^2 検定を行った結果、「ノーマークへの味方へのパス」及び「ドリブルでのキープ」に関して、有意差が確認されなかった。指導内容に対して適切と考える学年段階に一定の傾向は確認されなかった。「得点しやすい味方へのパス」に関して、多重比較を行った結果、「小 5-6 まで」が他の学年段階に対し、有意差が確認された。
 以上から、高等学校教師は、「得点しやすい味方へのパス」は、例示よりも早い学年段階での指

導が適切と考えている。しかし、「ノーマークへの味方へのパス」及び「ドリブルでのキープ」に関しては、適切と考えられる学年段階に、一定の傾向は確認されなかった。

2) 「ボールを持たない動き」に関して
 「ボールとゴールが同時に見える場所に立つ」に関しては、 χ^2 検定の結果、有意差は確認されなかった。「ボール保持者のマーク」に関しては、多重比較の結果、「小 5-6 まで」に有意差が確認された。また、「中 1-2 まで」との間に有意差が確認されなかった。「ゴール前の空いている場所

に移動し、パスを受ける」に関しては、多重比較の結果、「小5-6まで」と「中1-2まで」の間に有意差が認められず、「小4まで」との間に有意差が確認された。

以上から、高等学校教師は、中学1-2年の指導内容に関して、「ボールとゴールが同時に見える位置に立つ」内容に関しては、一定傾向は確認されなかった。「ボール保持者のマーク」及び「ゴール前の空いている場所へ移動し、パスを受ける」に関しては、当該学年を含めながらも、さらに早い学年段階からの指導が適切と考えていることが確認された。

(2) 中学3年 - 高校3年の指導内容に関する分析 1) 「ボール操作の技術」に関して

「ゴールの枠内にシュートをコントロールする」、「守備者の少ないゴールエリアに向かってトライする」、「ゴールに向かってボールをコントロールして運ぶ」及び「シュートを打たれない空間にボールをクリアする」に関して、 χ^2 検定を行った結果、有意差は確認されなかった。また、「味方が操作しやすいパス」に関して多重比較を行った結果、有意差は、確認されなかった。他の5つの指導内容に関しては、有意差は確認されたものの、適切と考える学年段階に幅があり、「小5-6まで」からの早い段階からの指導が適切であると考える高等学校教師が確認された。

以上から、高等学校教師は、当該学年で例示された「ボール操作」の指導内容に関して、適切と考えられる学年段階に一定の傾向が見られない、又は、幅広い学年段階に及ぶ傾向が確認された。

2) 「ボールを持たない動き」に関して

「ボールを持たない動き」14の指導内容に関して χ^2 検定を行った結果、「パス後の次のパスを受ける動き」に有意差が確認されなかった。残り13の指導内容のうち、11の指導内容において、多重比較の結果、有意差が確認された。また、「ゴールとボール保持者を結んだ直線上で守る」、「自陣から相手陣地の進入しやすい場所へ移動する動き」に関しては、有意差が認められ、当該学年よりも早い「中1-2まで」が適切な課題と考えてい

る。

以上から、高等学校教師は、当該学年で例示された「ボールを持たない動き」の指導内容に関して、例示された学年が適切、又は、その少し前の学年段階から指導するのが適切と考えていることが確認された。

IV 考察

1 小学校教師による評価の検討

小学校段階に例示された「ボール操作の技術」に関して、小学校教師は、概ね適切であると考えているようである。ただし、ドリブルの指導内容に関しては、小学5-6年から中学1-2年で指導することが適切であるとする教師が多い。これは、ドリブル技能の習得に個人差があり、児童にとって難しい技能であることが推察される。

また、小学校教師は、中学1-2年の学習内容の中でもパスに関わる技能、「得点しやすい味方へのパス」及び「ノーマークへの味方へのパス」に関しては、小学3-4年の早い時期に指導することが適切であると考えている教師が多い。これは、パスに関わる技能が、ゴール型ゲームの中心的な技能であるため、解説に示されている小学校の指導内容である「味方にボールを手渡ししたりパスを出す」、「フリーの味方へのパス」といった易しい内容以上のものを、小学校段階から指導しようとする傾向があるのではないかと推察される。

小学3-4年に例示された「ボールを持たない動き」に関して、小学5-6年が適切であるとする小学校教師が多かった。これは実際の授業場面での指導の手続きが分からず、指導しにくいのではないかと考えられる。また、小学5-6年に例示された指導内容に関しては、適切であると考えている。「ボールを持たない動き」はゲームを理解することであり、小学校の中学年より高学年の方が適しているとする教師が多いのではないかと考えられる。

また、日本体育科教育学会（2015）の報告は、「小6以下の段階で例示された指導内容は、解説に示された段階で指導する方が良い、また、中1-中2の段階で例示された指導内容は、解説に示された段階よりも早めの段階で指導する方が良いと考

えていると、推察される」としており、これは本研究で得られた結果と、概ね一致する内容であったと考えられる。

2 中学校教師による評価の検討

パスに関する技能については、小学3-4年から指導を始め、中学1-2年まで継続的に各学年段階で指導することが適切と考えている教師が多い。これは、小学校教師と同様に、パスに関わる技能が、ゴール型ゲームの中心的技能であることから、早い段階からの指導が適切であると考えていると推察される。また、ドリブルの技能に関しては、小学3-4年の早い段階からの指導が良いと考える中学校教師が多い。これは小学校教師が、ドリブルに関しては、小学5-6年から中学1-2にかけての指導が適切と考えていることと一致しない。その理由とし、ドリブルの技能は難しいため、中学校教師は、早い段階から、ボール操作に親しんで、技能習得に長い時間かける必要があると考えているのではないかと思われる。

ディフェンスの技能である「ボール保持者のマーク」は、小学3-4年から指導を始め、それぞれの学年段階で指導することが適切と考える中学校教師が多い。これは、ボールを持たない動きの中でも、ディフェンスの動きは理解しやすいため、早い学年段階からの指導が適切と考えているのではないかと思われる。

また、日本体育科教育学会（2015）の報告では、「中学校1-2年生に示された指導内容について、解説で示された学年段階で指導するのが良い」としている。しかし、日本体育科教育学会の報告を、指導内容ごとにみると、「ボール保持者のマーク」やドリブルの技能に関する指導内容では、早めの学年段階で指導するのが良いと回答している教師の割合が高く、これは本研究の結果と、概ね一致する内容であったと考えられる。

3 高等学校教師による評価の検討

高等学校教師は、当該学年で例示された「ボール操作の技術」に関して、適切と考えられる学年段階に対して一定の傾向が見られず、幅広い学年段階に及ぶ傾向が確認された。これについては、

対象教師が37名と比較的少数であったため、一定の傾向が確認できなかった可能性も考えられる。

また、中学3-高校3年に例示されている「ボールを持たない動き」の指導内容は、中学校から指導するのが適切と考えている。これについては、中学校教師と同様の傾向が見られた。

日本体育科教育学会（2015）の報告では、「中1-中2の段階で例示された指導内容は、解説に示された段階で指導するのが良い、また、中3以上の段階で例示された指導内容は、解説に示された段階よりも早めの段階で指導する方が良い」としている。これは本研究の結果と相違が見られた。その理由としては、本研究の対象者が37名と少ないことやN県に限定されていることなどが考えられる。しかし、詳細な検討については、日本体育科教育学会の調査結果を詳しく分析する必要がある。

V 摘要

本研究の目的は、児童生徒の学年段階に対応した技能の指導内容の適切性を、小学校、中学校、及び、高等学校の教師による評価から明らかにすることであった。具体的には、ボール運動系領域を対象とし、ゴール型に焦点を当てて行った。

対象は、N県の小学校教師174人、中学校教師87人、及び、高等学校教師39人であった。

得られた主な結果は、以下の通りであった。

(1) 小学校教師は、小学3-4年及び小学5-6年で示された技能の内容に関して、設定された学年は適切と評価する傾向にあった。

(2) 小学校教師は、小学3-4年の内容のうち「ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動する」に関して、小学5-6年以降に設定することが適切と評価する傾向にあった。

(3) 小学校教師は、中学校の指導内容に関して、小学校段階の早い時期に指導することが適切と評価する傾向にあった。

(4) 中学校教師及び高等学校教師は、中学3年-高校3年までの内容について、設定された学年よりも前に指導することが適切と評価する傾向にあった。

(5) 本研究と日本体育科教育学会（2015）の報告を比較すると、解説に示された指導内容とその学年段階についての評価は、小学校教師及び中学校教師は、同様の傾向であった。一方、高等学校教師には、相違が見られた。

(6) 本研究は、N県に限ったデータではあるが、その分析結果から、解説に示される指導内容の学年段階に検討を加える内容があることが示唆された。具体的には、以下の内容である。

・ドリブルに関する技能については、小学5-6年以降で指導する。

・パスに関する技能は、現行の解説で例示されている学年段階より、前倒しで指導する。

・ボールを持たない動きに関する内容に関しては、理解力の育つ小学5-6年以降で指導する。

本研究は、N県のみを対象としたデータであった。地域的に絞られているので、研究の限界を示している。今後、他の都道府県のデータを収集し、分析する必要がある。また、小学校では体育主任経験のない教師や中学校、あるいは、高等学校の保健体育科の教員免許を持たない教師が多い。そのため、教師の属性から分析を加える必要がある。

文献

- 岡出美則・劉静波・吉永武史・鬼澤陽子・小松崎敏（2007）
戦術学習モデルの効果-小学校におけるフットボールの授業分析を通して-。スポーツ教育学研究。27(1): 37-50.
- 高橋健夫（2008）新しい学習指導要領の方向（その3）ボール運動の指導。小学校体育ジャーナル。学習研究社。54: 1-12.

- 中垣貴裕・岡出美則（2009）中学校におけるベースボール型ゲームの守備のゲームパフォーマンスに関する評価基準の事例的検討。スポーツ教育学研究。29（1）: 29-39.
- 北村政弘・岡出美則・近藤智康・内田雄三（2014）小学校中・高学年におけるネット型ゲームのゲームパフォーマンスに関する達成基準の事例的検討。体育科教育学研究。30（1）: 1-16.
- 丸山真司（2015）体育のカリキュラム開発方法論。創文企画：東京。
- 岩田靖（2004）学習指導要領の変遷。体育科教育。52（2）: 160-167.
- 日本体育科教育学会（2015）学会プロジェクト報告・現行学習指導要領の実施状況を問う。日本体育科教育学会第20回大会。横浜国立大学。
- 文部科学省（2008）小学校学習指導要領。東洋館出版社：東京
- 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説体育編。東洋館出版社：東京。
- 文部科学省（2008）中学校学習指導要領。東山書房：京都。
- 文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説保健体育編。東山書房：京都。
- 文部科学省（2009）高等学校学習指導要領。東山書房：京都。
- 文部科学省（2009）高等学校学習指導要領解説保健体育編。東山書房：京都。
- 吉田文久（1997）球技の学習内容。竹田清彦・高橋健夫・岡出美則編。体育科教育学の探究。大修館書店：東京。pp.165-180.
- 白旗和也（2013）体育の学力調査の計画と課題。スポーツ教育学研究。32（2）: 99-102
- 中央教育審議会（2002）子どもの体力向上のための総合的な方策について（答申）。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/021001.htm（参照日 2015年9月30日）
- リンダ・L・グリフィン、ステファン・ミッチェル、ジュディ・オスリン：高橋健夫ほか訳（1999）ボール運動の指導プログラムー楽しい戦術学習の進め方ー。大修館書店：東京。